2023年2月11日

乗木養一

5年A漢字

総

の字誌 (PDF版 Ver.20230211a)

精選案	2009年改定(2010年補正)教育漢字精選案で A 漢字に。
漢字表	当用漢字・教育漢字に採用。
配当学年	一貫して5年配当。
基本漢字表	カナモジカイ 500 字案に採用。
出現頻度	最新調査で 492 位。
習得状況	「読み」とくらべて「書き」が,かなりむずかしい。
音 訓	音「ソウ」のみ。
字体と字形	当用漢字の字体になるまで,旧字体は,学習負担が大き
	かった。
字体の変転	甲骨文・金文になく,小篆以降にみられる。「糸」+音符
	「悤」[ソウ]から構成されており,音符部分の略体を現
	行字体がとりいれ「総」となった。
字源諸説	音符「悤」[ソウ] に意味をもたせるかどうか検証が必要。
字義	字義と意味の変転過程は,比較的シンプルに理解できそ
意味の変転	うである。
日本語の	後熟語をつくらない。
語イ	接頭辞として名詞の上につく語が圧倒的に多い。
	「総」と「全」のつかいわけ。
	「総合」の語例。
	意味理解と運用に困難さがともなうI字音読み漢字。
	*別ファイル「総 語イ表」参照。
意味の指導	全体をつらぬく共通のイメージ
構想	「すべてをひとつにまとめる」
	* それほど意味のへだたりが大きくないので,実態に
	よっては,意味を2つにくわけしなくてもよいだろう。
	漢配本現得訓との 字字味本語 学学 字

1. 国字研精選案における位置づけ

国字研精選案におけるあつかいのうつりかわり

				_
	1978年8月	大久保忠利第 次私案	小学校600字	0
		第3手順で「B基本漢字」に選定		
	1978年12月	見城慶和・関可明修正案	小学校758字	0
	1984年4月	小学校第1次素案	小学校600字	_
		「-:小学校精選案にふくめなかった」		
	1987年8月	小学校第2次素案	小学校600字	_
旧精選案	1988年8月	国字研小学校第3次素案		Δ
		○漢字614字,△漢字186字(計800字)		
		「 <mark>△</mark> 漢字:小学校では読めればいいと ⁻	する漢字」に分類	
	2009年8月	2009年改定精選案	A漢字608字	A
		「A 漢字:読み書き漢字。読み書き両方の力を定え	着させる」に分類	
	2010年5月	2010年補正精選案	A漢字608字	A
現行精選案	2017年3月	2017年学習指導要領改訂に対応の精選案	A漢字608字	Α

大久保忠利第 | 次私案(1978年)

国字研の「教育漢字精選案」では、当初の 1978 年 8 月に大久保忠利が発表した「**第 | 次私案**」(600 字精選案)で、「A 特別漢字」(100 字)、「B 基本漢字」(500字)」のうち「B 基本漢字」に「総」をとりいれています。

大久保は、精選にあたり、つぎの3つの手順をふみました。

第 | 手順は,❶「国立国語研究所7年間連続調査」で「読み・書き」ともに 50 %台以上可能だった字をえらぶことにしたといいます。「総」は「書き」だけが 30 %台だったことから,この段階でまず除外しています。

	30%台	
「国立国語研究所調査」	3年用	勝
小学校7年間連続調査	4年用	置芽曲輪委挙努氷焼
1952年-1959年	5年用	* * * * 象復居令辞蚕満酸票測
「書き」の平均正答率が 30 %台であった。		似解 <mark>総</mark> 量型確腸志破倉
	6年用	低 * * * 諸后略絶眼蹇険豊拝律
(国立国語研究所報告 26	0 4-/13	属盟需可拡純提罪墓革
『小学生の言語能力の発達』明治図書, 1964 年)		孝難混蔵税

第2手順は,●の調査で「読み・書き」ともに 50 %台以上にならなかった漢字 394 字を対象に,❷「文化庁調査」と,❸「清滝小学校調査」でもかさなって成績がわるかった字をとりだし「**難学習漢字**」としました。これが 200 字あったといいます。「総」は,習得状況がわるいことからこの段階でも除外対象となりました。

②「文化庁調査」(6年間調査) 1964年 - 1969年

学年別正答率 (%)

調査漢字	調査問題		小3	小4	小5	小6	中I	中2	中3	高I
総	総しあげ	書き			24	42	65		78	
5年配当		読み			63	86	93		97	
	内閣総理大臣	書き								89.5
		読み								

空欄は調査をしていないものとみられる。

(文化庁文化部編,国語シリーズ 67 『児童・生徒の読み書きの力』当用漢字について, 大蔵省印刷局,1972年)

栃木県日光市立清滝小学校調査 1956 年

各学年ごとの正答率(%)

読み

書き

	l 年	2年	3年	4年	5年	6年	l 年	2年	3年	4年	5年	6年
総 6年配当				2	20	61					2	23

空欄は調査対象とならなかった学年。

調査問題は、読み「総額」、書き「一年間の貿易の総額」。

(文部省,初等教育研究資料第 19 集『漢字の学習指導に関する研究』明治図書,1957 年)

[注] 文部省は、「小学校学習指導要領」に「学年別漢字配当表」を設定する目的で、漢字の学習指導順位の検討をするとして全国 35 の実験学校を指定して 1952 年から 1954 年の 3 年間かけて習得状況調査をすすめています。このとき試案で「総」は 6 年配当としていました。最終報告が 1955 年にとりまとめられました。この清滝小学校のものはそれをうけての最終調査でした。1956 年 2 月下旬に全校児童を対象におこなっています。結果は、上の表にみるように、じつにいたましいものとなりました。ところが、文部省は、1958 年「小学校学習指導要領」の「学年別配当表」では、試案より 1 年下の「5 年配当」としたのです。35 校の習得状況調査 3 年間の通計正答率が「読み 86 %」「書き 67 %」と好結果だったことを根拠にしています。しかし、35 校の個別の結果をみると、とんでもないバラツキがあるのです。6 年で「書き」が 22 %とか、25 %、32 %といった学校がある一方で、ある学校は「読み 100 %」、「読み・書きともに 98 %」などとあり、この数字が全体をおしあげたことがわかります。

大久保忠利第 | 次私案の第3手順は、候補にした第 | 手順 487 字と、第2手順 194 字の合わせて 681 字のなかから 81 字をのぞくことにしました。

さらに「最終くふう」をくわえ,いくつかの調整をへて「A特別漢字(100字)」「B基本漢字(500字)」案を決定しました。小学校での生活空間内の必要度を尺度にしたといいます。

ここで「B基本漢字(500字)」に「総」をとりいれることにしています。

【旧精選案】小学校第3次素案(1988年)

1988 年 8 月に国字研「第 3 次素案」は,「総」を「小学校で読めればいい」とする「B漢字」に位置づけました。

| イセット5過程方式による『漢字プリント』(小学校 5 年,日本教育出版サービス,1994年)や,『たのしく みにつく 漢字のカ』(小学校 5 年,ルック,2006年)は,「B漢字」のあつかいにして編集しました。

【現行精選案】改定小学校学習漢字精選案(2009年改定·2010年,2017年補正)



それから 20 年後の 2009 年に国字研は、「第 3 次素案」を改定した「2009 年改定(2010 年補正)教育漢字精選案」(現・小学校学習漢字精選案)を公表しました。ここで「総」を小学校で読み書き両方のちからを定着させる「A 漢字」に選定しました。

2009年改定は、紺屋冨夫を中心に、ほぼ2年にわたり月例会で一字一字検討をし、国字研の複数の事務局員の試案をまじえながらまとめたものです。

精選の観点に「使用頻度、機能性(漢字語形成力)、必要性(学習や日常生活 に必要であるか)が高いか」、学校教育において「適切な時間配分で指導できる 漢字数か」(読みとり、作文、文法などの指導時間が確保できるか)をたてて、 実際の漢字指導に生かすことができる「精選案」をめざしました。

2. 漢字表

(1) 当用漢字表(1946年11月16日,1850字)

右図→

(3) 当用漢字音訓表(1948年2月16日)下図↓

糸部 総 ツウ

(4) 当用漢字字体表 (1949年4月28日)

右図→

総

(2) 当用漢字別表

(「教育漢字」1948年2月16日,881字)下図↓

杀部

系紀約納純紙級素細終組結絕給統糸(絲)絹経(經)綠綿線編 練縣総(總)績織絵(繪)統(續)

- (5) 当用漢字改定音訓表(1973年6月18日) 音「ソウ」だけで、変更なし。
- (6) 常用漢字表(1981年10月1日)↓

総(總) ソウ 総合,総意,総括

2010年改定で変更なし。

3. 小学校学習指導要領の学年配当

配当学年の推移

告示	実施•使用開始	学習指導要領·教科書			教育漢字数
	1947年4月	学習指導要領(試案)	〔注Ⅰ〕	5年	684
	1951年4月	小学校学習指導要領(試案)	〔注2〕	あり	881
1958 年	1961年4月	小学校学習指導要領		5年	881
1968 年	1971年4月	小学校学習指導要領		5年	996
1977 年	1980年4月	小学校学習指導要領		5年	996
1989 年	1992年4月	小学校学習指導要領		5年	1006
1998 年	2002年4月	小学校学習指導要領		5年	1006
2008年	2011年4月	小学校学習指導要領		5年	1006
2017年	2020年4月	小学校学習指導要領		5年	1026

- [注1] 1947年『文部省著作国語教科書』第6期国定読本(いいこ読本)の提出学年と 教育漢字数である。
- [注2]「881字」は、義務教育期間中の指導字数である。「総」もふくまれていた。

総の字誌 20230211a

音訓の学校段階別わりふり(2017年3月31日 文部科学省)

セン (小学校)

4. 基本漢字表

1. カナモジカイ500字案 1936年

〔ソ〕素早相送草總 造增速存村損

(オカザキ ツネタロウ・岡崎常太郎『漢字制限の基本的研究』, 松邑三松堂, 1938 年)

2. 夜間中学生のための生活基本漢字381字(見城慶和作成) 1975 年 該当なし

(国字研・漢字指導法研究会ウェブページ)

3.「日本語基本漢字『未来』500字」案 竹端瞭一(たけば りょういち)1990年

(ソ)祖素組早争相草送装僧<mark>総</mark>造像足速族存村

(『川村学園女子大学研究紀要』第2巻,1991年3月)

竹端 瞭一は,1990 年までに公表された下記 7 種の「基本漢字表」をとりあげ、そのひとつひとつを検討し、この「『未来』500 字案」にとりまとめました。元川村学園女子大学大学院教授、元西オーストラリア大学日本研究科客員講師、元財団法人日本のローマ字社理事。すでに鬼籍にはいっています。

- 1) STB 漢字 450 字 1970 年 日本 STB 協会の提案。Science Technology Business (『漢字は 500 でたりる』これからの実務漢字,日本 STB 協会,1971 年)
- 2) 書き漢字 600 字大久保素案 1988 年 国字研大久保忠利第一次私案
- 3) 早稲田大学日本語教科書 約500字, 1972年
- 4) 『わかる日本語』第1~第2 368字, 千駄ヶ谷日本語教育研究所, 1978年
- 5) 生活基本漢字表 1988 年 夜間中学生のための生活基本漢字381字
- 6) 『日本語初歩』新出漢字 383 字 1989 年国際交流基金日本語国際センター編
- 7) 韓国高校の日本語教科書 3 種 1987 年
- 4. 「日本語教育の参照枠」における「基礎漢字」 | 22字 (文化審議会国語分科会) 2021 年 該当なし

(『日本語教育の参照枠』報告 文化審議会国語分科会 2021 年 10 月 12 日, P.68)

5. 出現頻度

(1)「現代新聞の漢字」国立国語研究所 1976年

全体順位 153 位。

1966 年 1 月 1 日付け~ 1966 年 12 月 31 日付けの「朝日新聞」「毎日新聞」「読売新聞」 3 紙の朝夕刊全紙面につかわれた漢字を異なり字種ごとにまとめ、順位づけています。

それによると「総」は、つぎのような順位となっていました。

全体順位 153 位,全体使用率 1.529 % 層内順位 政治 72 位,社会 264 位,経済 140 位, 文化家庭 365 位,運動芸能 408 位,広告 146 位

用語例

153 総* 1516

ソウ [1486/55]

剤 絵じて

語 総アート 総当たり 総意 総員 総会208 総 ガイド(スキー場~) 総額52 総括13 総柄 総監11 総置 総業(アジア~・社名) 総局 総相 総くずれ 総計10 総合[綜合10]163 総裁143 総菜 総ざらい 総ざらえ 総持(~寺) 総しぼり(総絞り) 総省 (国助~) 総称 総帥 総数30 総勢 総体 総隊 総代 総タカリ(一億~) 総立ち 総長100 総坪 総出 総統22 総督 総トン 総ねり(天然木~・たん

お花(~的·~式) 総張り 総評97(日本労働組合総評
 場金) 総評(全体の評) 総務83 総門 総理63 総力
 総連15(E族~) 総論 総和 総ワク

题 総-393(~選章・~監督・~動目)

图 中総(中央委員会総会)

仄驱 [30/8]

囚〔5/4〕 総一郎 総三 総子 / 下総字

题 [25/4] 総社 / 下総 图 (総武10 房総13)

(2)「**漢字出現頻度表(3)**」文化審議会国語分科会 2007 年 3 月

全体順位 326 位。教科書での出現例は 246 位。新聞での出現例も 200 位台。

漢字出現頻度表 順位対照表(Ver.1.3)

凸版(3) 順位	漢字	種類	表外漢字 字体表	新聞調査 (朝日)	新聞調査 (読売)	ウェブ データ A	凸版(3) 第2部
324	院	常用		152	153	305	196
325	他	常用		599	538	193	314
326	総	常用		223	222	412	246
327	術	常用		227	289	438	280
328	支	常用		180	181	388	161

2010 年常用漢字表改定のとき に,文化審議会が改定作業に 使った資料。審議では,一般 の書物である「凸版(3)」調 査を基本資料とし,他の調査 を補助資料と位置づけた。

凸版(3)順位 新聞調査(朝日) 新聞調査(読売) 2004 年から 2006 年までに凸版印刷が製作した 864 冊分の組版データ 2006 年 10 月 1 日から 11 月 30 日の期間の朝日新聞の紙面データ 2006 年 10 月 1 日から 11 月 30 日の期間の読売新聞の紙面データ

(2008年5月12日 文化審議会国語分科会漢字小委員会資料)

国字研の「2009 年改定教育漢字精選案」(現・小学校学習漢字精選案)の とりまとめには、この「漢字出現頻度数調査(3)」を利用しました。

(3)「漢字出現頻度表(4)」文化審議会国語分科会 2022年2月

全体順位 493 位。

				全体	k	辞典	類	単行	本	週刊	誌	月刊	誌	教科	書
順位	種類	漢字	出現回数	度数%	累積度数	出現回数	度数%	出現回数	度数%	出現回数	度数%	出現回数	度数%	出現回数	度数%
491	常用	寄	26887	0.052	73. 266	2005	0. 027	12148	0.066	3281	0. 048	8997	0.055	456	0. 022
492	常用	井	26823	0.052	73. 318	4264	0.057	9934	0.054	3113	0. 045	8738	0.053	774	0. 038
493	常用	総	26708	0.052	73. 370	4247	0. 057	7009	0. 038	7141	0. 104	6829	0. 041	1482	0.073
494	常用	賞	26670	0. 052	73. 422	1719	0. 023	5432	0. 029	6439	0.094	12783	0. 078	297	0. 015
495	常用	戸	26669	0.052	73. 474	1988	0. 027	11086	0.060	3686	0.054	7965	0.048	1944	0. 095
	-				!				_		_		_		_

2010 年常用漢字表改定から 10 年あまりが経過したことから,文化庁が定着状況の確認と,今後のみなおしに活用することを目的に,凸版印刷の組版データをもとに,数値化したものです。

6. 習得状況やリテラシー調査の結果

読みとくらべて書きが、かなりむずかしい。

1.国立国語研究所「漢字の習得度調査」1982 年 - 1984 年

国立国語研究所が 1982 年から 1984 年にかけておこなった「漢字の習得度調査」の結果です。1981 年に当用漢字表が廃止され、常用漢字表が制定された直後の調査です。なお 1985 年には「付表の語」についてのみ調査しています。

調査は、常用漢字 1945 字の一字一字を対象としました。うち小学校学習 漢字 996 字は、1977 年告示、1980 年実施の「小学校学習指導要領」の学年 配当をもとにしています。

3年間で東京都内の小学校のべ85校,中学校52校,高校20校,秋田県の小学校8校,中学校3校,奈良県の小学校13校,中学校3校が協力しておこないました。(1985年「付表の語」調査:東京都の小学校3校,中学校2校,高校2校)

主調査地域だった東京都の集計をもとに習得状況を以下にしめしました。

「国立国語研究所調査」(東京都の集計) 1982年 - 1984年

調査時期 小4年 小6年 小6年 中1年 中3年 音訓 調査問題 4月 11月 11月 11月 11月 総理大臣 88.5 | 95.5 | 97.5 | 99.0 | 99.5 ソウ 読み **38.0** | **45.0** | **57.0** | **91.0** ソウ 総理大臣 3.0 書き

「総」 5年配当漢字/到達度調査時期:小学6年生4月

(国立国語研究所報告 95 『児童・生徒の常用漢字の習得』東京書籍,1988 年 3 月 25 日)

読みの習得率は高いが、書きは中学生になっても50%台でした。

この「漢字の習得度調査」は、国立国語研究所の言語教育研究部第一研究室がおこないました。言語教育研究部第一研究室長の大久保愛(1982 年度末退任後名誉所員)も参画しました。

そしてこの調査結果『児童・生徒の常用漢字の習得』は,「**国字研小学校** 第3次素案」(1988 年 8 月発表)の作成にいかされました。

2. 特定の課題に関する調査 2006 年 国立教育政策研究所 (特定の課題に関する調査 国語,算数・数学,国立教育政策研究所,2006年7月) 「総」は、調査対象にしていません。

7. 読みかた・音と訓

音のみで訓はない。小学校段階に割り振られる。

1. 音訓

- 当 「当用漢字音訓表」(1948年)に収録された音訓。
- 常 「常用漢字表」掲載の音訓。

赤字「国字研プリント」の文に掲出のコトバ。

2. 日本漢字音

[中国語音]《意味》

日本漢字音と語例

総 [zǒng] 呉音・漢音 [**ソウ**] 総合・総意・総括 《あつめる・まとめる》

3. 同音・同訓の漢字

ソウ	早①, 草①, 走②, 相③, 想③, 送③, 争④, 倉④, 巣④高, 宗⑥中, 奏⑥, 窓⑥, 創⑥, 装⑥, 層⑥, 操⑥, 双常, 壮常,
	花電, 美色, 态色, 剧色, 表色, 眉色, 揉色, 双语, 红语, 红花常, 搜常, 挿常, 桑常, 掃常, 曹常, 曽常 2010 追加,
	爽常 2010 追加, 喪常, 痩常高 2010 追加, 葬常, 僧常, 遭常, 槽常, 踪常 2010 追加, 燥常, 霜常高, 騒常, 藻常, 贈常

〇数字:配当学年, ②:小学校学習漢字外の常用漢字, 中:中学校段階にわりふり, 高:高等学校段階にわりふり,

4. 小学校国語教科書における音訓の提出学年(2020年版)

	光村	教出	東書	学図
ソウ	5年	5年	5年	5年

赤字が本文提出の音訓

5年教科書本文の語

[光村図書] 総合的な学習の時間

[教育出版]総合的な学習の時間

[東京書籍] 総合的な学習の時間

[学校図書] 総合病院

5. 和語の語幹・活用語尾と【送りがなのつけかた】

そう・じ-て【総じて】〈副詞〉

通則 5 例外 (3)

「そう・ずる」(総ずる)の連用形「そう・じ」に接続助詞「て」がついてできているものとみられます。「送り仮名の付け方」通則5,例外(3)「他の語を含む語は、含まれている語の送り仮名の付け方によって送る」にあてはまるようです。

6. 用例が交雑する同音類義字

いずれも常用漢字表外の字です。「惣」は人名用漢字。

物 [ソウ] 意味《すべて・みんな・そうじて》

「惣村・惣領 (総領)・惣菜 (惣菜)」

ほんらい《あつめたばねる》意味の「摠」[ソウ] だったが、俗字の「摠」 (手+音符忽[ソウ])が一般化し、さらに、ながいあいだに「惣」(牛+忽)」 とあやまって書かれるようになったという。「総」が書きかえ字。

牧学 水下〔ソウ〕意味《ぜんぶをまとめる・いりまじる》「錯綜・綜合(総合)」

湊 [ソウ] 意味《みなと・水があつまる・あつまる》 「輻湊(輻輳)・湊合(総合)」

8. 書きかた・字体と字形

現行字体の「総」は、旧字体の「總」の略体。書きやすくなった。

1. 字体



小学校学習指導要領は,「漢字の指導においては, 学年別漢字配当表に示す 漢字の字体を標準とすること」としている。「旧字体」はこれにあたらない。

2. 部首・偏旁冠脚



音符の「悤」[ソウ] の上部「囱」[ソウ] が省略形の「公」となり、 現行字体となった。

3. 旧字体

旧字体の本字と俗字



本字(康熙字典体)



右上部は、「本字」とされるのがとしたがときといる。 当用漢字の字体になるまで、大きな学習負担だったという。

おもな異体字

別称總物

俗 總 粮 粮 粮 餐 鬈 鬈 縂 绕

現代中国の簡体字

「囱・ 悤」[ソウ] を音符とするおもな字

囱 [ソウ] 十心→ 悤 [ソウ]

囱→窗→窓→窓 ⑥ [ソウ] 《まど》

終 → **総** ⑤ [ソウ] 《まとめる》

聰→聡 人名 [ソウ]《耳がさとい》「聡明」

・・・・・ → 勿 _{表外字} [ソウ]《あわただしい》「匆忙」

想→惣→惣 人名[ソウ]《全部をまとめる》「惣村」

P.11「用例が交雑する同音類義字・惣」参照

4. 現行字体の構成要素



糸①, 絵②, 紙②,

組②, 細②, 線②,

係③, 終③, 級③,

緑③, 練③, 孫④,

給④,約④,結④,

続4, 縄4, 紀5,

素⑤, 綿⑤, 絶⑤,

績⑤, 編⑤, 統⑤,

織⑤ 経⑤, 系⑥,

絹⑥, 縱⑥, 紅⑥,

純6, 納6, 縮6,

(以下略)



公

公②, 松④, 訟常, 翁常, 聡人名, 頌人名



心②, 思②, 悪③, 意③,

感③, 急③, 想③, 息③,

悲③, 愛④, 億④, 念④,

德④, 応⑤, 志⑤, 態⑤,

恩⑥, 憲⑥, 誌⑥, 窓⑥,

忠⑥, 認⑥, 忘⑥, 優⑥,

(以下略)

5. 楷書の画数と標準的な筆順, さまざまな字形





小学校硬筆例



印刷文字の字形の例							
明朝体	ゴシック体	ユニバーサル デザインフォント	UDデジタル 教科書体NR	学年別漢字 配当表			
総	総	総	総	総			

手書き文字の字形の例

総総総

『常用漢字表の字体・字形に関する指針(報告)』 文化審議会国語分科会(2016年2月29日)を一部改編 6. 字体の正誤についての評価における許容例

(1)画の折りかたのちがいは、字体のちがいにはならない。



(2)はらって書くことも,とめて書くこともある。



(3) たて画の終筆をはねて書く ことも、とめて書くことも ある。



(4) 点の方向には, いろいろな 書きかたがある。



(5)明朝体活字の字形と 手書きの楷書の字形 とのちがいは、字体 のちがいにはならない。



7. 類似字形





8. 誤字例



- 9. 口唱法
 - (I)下村式 (『小学漢字学習辞典』偕成社)

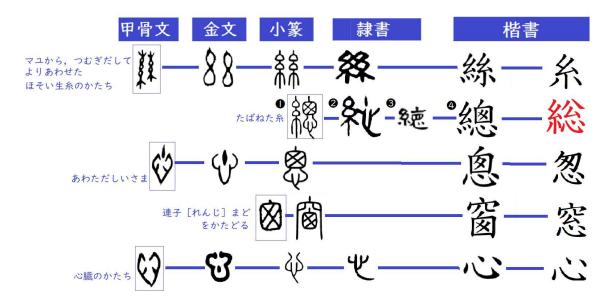
糸[いと]へんに ハ[は] ム[む] 心[こころ]

(2)自由自在式 (『小学漢字新辞典』受験研究社)

糸 [いと] でまいたハム 心 [こころ] して総勢 [そうぜい] で食べる

9. 字体の変転

小篆以降にみられる。「糸」+音符「悤」[ソウ] から構成されており,音符 部分の略体を現行字体がとりいれ「総」となった。



各字体について

■ 「総」は、いまのところ甲骨文や金文から見つかっていないようです。



図の**●**は,『説文解字注』からとった小篆 [しょうてん] をかかげました。『説文解字』は「総」の意味についてつぎのように述べます。

聚束也。从糸悤聲。

《あつめてたばねる。糸から構成され、「悤」が音。》

すでに「糸」をはじめ、「心」や「忽(悤)」[ソウ] のもとの字体は、甲骨文からありました。「総(總)」は、春秋戦国時代になって、これらを要素にしてくみたてられた形声文字とみられます。

「悤」[ソウ] は、心臓に針のようなものをさした状態をあらわす会意文字で、《あわてる》《いそぐ》《あわただしい》といった意味をもっていたようです。「総(總)」の場合は、「悤」が [ソウ] と読む音符となっており、 意味をうけついでいないと解釈できます。

なお「窓」[ソウ] は、小篆から登場しますが、当初の字体は、細い木材をたてに一定の間隔でならべた《連子 [れんじ] まど》をかたどったものとみられています。この当初の字体と「総(總)」の音符が共通しますが、やはりこれも意味に関連は、ないでしょう。

② BC3 世紀, 戦国時代末期, 秦の時代の竹簡に書かれていた「総」の字体です。初期のころの隷書[れいしょ]です。

この竹簡は、1975 年 12 月に湖北省雲夢県睡虎地というところで発見された秦代の役人の墓から見つかった 1150 点あまりのなかのひとつです。出土地の名をとって「雲夢秦簡」[うんぼうしんかん] とか「睡虎地秦簡」[すいこちしんかん] とよばれています。

右に引用したのは、秦代の法律の条文を抜粋して記述した「秦律十八種」(18 種類の秦律の条文) 201 枚のなかの一枚です。ここに「総」が 2 件書かれています。

「倉律」といって食料備蓄の運営にかかわる部分です。

更隸妾節 有急事 總冗 以律稟食 不急勿總 倉

[かなりの意訳] 一定のかぎられた時間だけ服役している更隷妾 [こうれいしょう] は,緊急の任務があり,すぐに集める場合は,律にしたがって,その場で兵士一人分の食料を発給する必要がある。急ぎでなく,集める必要はない(=食料を発給する必要はない)。倉(倉律)。

【右写真】睡虎地秦墓竹簡整理小組『睡虎地秦墓竹簡』(文物出版社,1978年) (P.24 **4**-② たばねる・まとめる・あつめるに該当)



❸ BC1 世紀,前漢の時代の木簡に書かれていた「総」の字体です。隷書 [れいしょ]が確立していた時期にあたります。

1959 年,甘粛省武威市磨嘴子 [ましし] 遺跡の漢代の墓から出土した木簡のひとつに書かれていました。

儒教の経書のひとつ『儀礼』[ぎらい] の「喪服篇」の「伝」 (注釈) で、喪中の女性の髪のととのえかたについて、もとゆ いや、かんざしについて、ことこまかく書かれている部分です。

總六升 長六寸

[かなりの意訳] もとゆいは,たて糸の数6升,長さ6寸。

「もとゆい」は、髪を頭の上に集めてたばねる糸で、6 升は 糸 480 本です。 (P.24 **3**- ④ 髪をたばねる糸に該当) 更 隸 妾 節 有 事 兀 以 食 不 勿

總

隷書の完成期の「総」



左は,「樊敏碑」[はんびんひ] という石碑に刻まれている「総」で す。隷書の完成期のものとみられます。

この碑は、後漢末期の205年に四川省でつくられています。

高さ 293cm、幅 120cm、厚さ 28cm のもので,そこには,巴郡太守(巴郡 [は ぐん] の長官)をつとめる樊敏 [はんびん] の家系と後漢王朝の混乱を説明する 22 行の文がきざまれています。



なお,この石碑が発見された 12 世紀 に,そのときの経緯もいっしょにきざ まれています。



【左写真】早稲 田大学図書館所 蔵の拓本。石碑 は,四川省芦山 県「東漢石刻館」 に保存。

一部拡大

全体像

總角好學治春秋巖氏經

[かなりの意訳] <mark>幼児の時分</mark>のまじわり(総角の好)による学びは,『春秋』 『厳氏経』をおさめた。



「総角」[そうかく] とは,こどもの髪形です。それが転じて,《こども》という意味になり,「総角の好」[そうかくのよしみ] は,《こどものころのまじわり》でそれが,やがて《小さいこどもの時分からの,長く親しい交際》という意味でつかわれるようになりました。

「総角」『学研漢和大字典』

(P.24 **3**-5 あつめてたばねた髪に該当)

さまざまな書体

現行の字体は、複雑な「總」のうち、「囱」を「公」に略して書きやすくなり ました。









楷書

行書

隷書

草書

8世紀

顔真卿[がんしんけい] 顔真卿[がんしんけい] 伊秉綬[いへいじゅ] 徐伯清[じょはくせい] 8世紀

18世紀

20世紀



康熙字典体

常用漢字表 のかっこ書き 現行字体

各国の常用字体の比較

603B

日本 中国

7DCF

台湾

7E3D

香港

7E3D

韓国

日本「常用漢字表」

中国「通用規範漢字表」

台湾「常用国字」

香港「常用字字形表」

韓国「漢文教育用基礎漢字」

※それぞれの数字・記号はUnicode。

安岡孝一・安岡素子『日本・中国・台湾・香港・韓国の常用漢字と漢字コード』 (京都大学人文科学研究所,2017年)をもとに構成した。

7E3D

10. 字源諸説

ほんらいの意味《糸をあつめてたばねる》で、各説一致しているようだ。

「総」の字源各説を一覧します。

- (1)『説文解字』(形声文字)音符「悤」。「聚東也」《あつめてたばねるなり》
- (2) 加藤常賢説(形声文字)音符「悤」。

『説文解字』説を支持しています。さらに『詩経』(国風・召南・羔羊 [こうよう] 篇)の「羔羊之縫、素絲五總」をひいて、「総」の本義を《**糸をあつめてたばねる**》とみます。それから「総」の意味は、単に《あつめてたばねる》となり、糸の意味を脱落させたとします。(『漢字の起原』角川書店)

羔羊之縫、素絲五總 《子ヒツジのかわごろも、たばねたきいと》

(3)藤堂明保説(会意兼形声文字)音符「悤」。

藤堂明保は、細い木材をたてに一定の間隔でならべた《連子 [れんじ] まど》をかたどった「囱」[ソウ](P.12 参照)や、《あわただしい》の意味をもつ「悤」[ソウ](P.12 参照)とむすびつけて、「総」の字源を説いています。

窗《まど》の下部は、もと空気抜きのまどを描いた象形文字で、窓の原字。へやの空気が一本にまとまり、縦に抜け出ること。「總」の右側の字「悤」[音ソウ] は、それに心を加えたもので、多くの用事を一手にまとめて忙しいこと。「總」はそれを音符とし、糸を加えた字で、《多くの糸を一つにまとめて締めたふさ》。《一手にまとめる》意となる。「総」はその略字。(『学研漢和大字典』)

[注] 赤の下線部分は,小学生むけ学習漢字辞典の記述に影響をあたえている。

形声文字の音符にも、なんらかの意味をもたせようとする傾向がつよい 藤堂明保ですが、ここでも、かなり無理に、「囱」《まど》や「悤」《あわた だしい》の意味を「總」(総)にむすびつけています。

(4) 白川静説(形声文字)音符「悤」。

白川静も、『説文解字』説を支持しています。『説文解字』の「聚束也」を《あつめてつかぬるなり》とよみくだし、『説文解字』は「糸の末端のところを結んで房[ふさ]のようにまとめることであるとする。」と解説します。

さらに BC1 世紀,後漢末の辞書『釈名』[しゃくみょう] の「釈首飾」の「總は束髪なり」をひき、「たばねた髪」という意味にもふれています。

そして白川静は、つぎのようにまとめます。

「まとめる,あつめる,すべる(ひとつに集めまとめる),すべて」の意味に用いる。また、総督(軍司令官。また、植民地の政治・軍務を監督する長官)のように、一つにまとめて支配するの意味にも用いる。」
(『字統』平凡社)

白川静にはめずらしく神がかった、ものいいになっていません。また、藤堂明保とちがって「囱」や「悤」にも言及していません。「総」が甲骨文や金文にみられない、来歴が新しい字であるからでしょう。

どちらかというと, 既定の字義をひととおりならべたにすぎない説明と なっています。

(5)阿辻哲次説(旧字「總」は形声文字)音符「悤」。

21 世紀の現段階でのいちおう優勢な説を簡潔に紹介しています。とりたてての独創はみられません。

「糸」と、音符「悤」[ソウ]とから成る。**束ねた糸**、ひいて「**すべる**」 意を表す。教育用漢字は、もと俗字による。(『新字源』改訂新版,角川書 店)

音符「悤」[ソウ] に意味をもたせるかどうか検証を要する

古典中国語の書物,注釈書,辞書などから「総」の意味を,約 20 とおりあつめることができます。

用例などをもとにすると、おそらくほんらいの意味は、(1) **《糸をあつめてたばねる》**という意味の動詞でしょう。

動詞の用法は、(1)《糸をあつめてたばねる》から「糸」が脱落し、単に(2) **《あつめたばねる**》という意味になったととらえられます。

ひいて《**まとめる**》(すべる・おさめる) がうまれます。

そして副詞として《**すべて**》などの意味が登場します。

また《糸をあつめてたばねる》をもとに、《**多くの糸を一つにたばね、まとめたふさ**》の意味の名詞となったとかんがえられます。

字源と意味の変転過程は、比較的シンプルに、理解できそうです。

一方で音符「悤」[ソウ] になんらかの意味があるのか, どうかが, この字の字源をかたるうえで, 大きな問題となりそうです。

藤堂明保がいうような「囱」《まど》,「悤」《あわただしい》の意味が「總」(総) の意味におよぶととらえるのは、かなりの無理がありそうです。

発音のみをあらわす音符ととらえるのが、順当なみかたといえそうです。

ところが次ページに一覧する小学生むけ学習漢字辞典の字源解説は、ことごとく音符の「悤」に<u>《まとめる》《あつめる》《あつめてたばねる》</u>といった意味を もたせています。

「形声文字」としめしていますが、事実上「会意兼形声文字」であり、いわゆる「亦声」[えきせい] のあつかいとしています。

このとらえかたは、はじめに(2)《**あつめたばねる**》という意味が「悤」にあり、それにあとから「糸」がくわわり、(1)《**糸をあつめてたばねる**》という意味で「總」(総)ができたということになります。

真逆のとらえかたであり、検証が必要になります。

小学生向け学習漢字辞典の字源解説

小学館 例解学習漢字辞典	もとの字は總。悤は,囪(空気が出るまど)と心とで,できた字で,へやの空気が一つにまとまって,まどから出ていくところから,「ひとつにまとめる」という意味を表す。それに糸をつけて,何本もの糸をまとめて作ったふさを表す。(藤堂明保ほか編)
学研プラス 新レインボー 小学漢字辞典	もとの字は「總」。
光村教育図書 小学新漢字辞典	旧字体は總。「糸[いと]」と「悤[ソウ](<u>まとめる</u>)」 とを組み合わせた字。たくさんの糸を束[たば]ねるこ と,一つにまとめることを表す。(甲斐睦朗監修)
三省堂 例解小学漢字辞典	形声文字。もとの字は「總」。「悤」が[ソウ]という読み方をしめしている。「ソウ」は「 <u>あつめる</u> 」意味を持ち, 糸をたばねることを表す字。(林四郎ほか監修)
ベネッセ チャレンジ 小学漢字辞典	形声文字。もとの字は總。糸(いと)と悤[ソウ](<u>あつめてたばねる</u>)を合わせた字。糸をあつめてたばねることから,「しめくくる」という意味を表す。(桑原 隆 監修)
*旺文社 小学漢字新辞典	形声文字。旧字体は總。意味を示す糸(いと)と,音を示す悤(ソウ。集めてたばねる)を合わせた字。糸を集めてたばねる意味。(尾上兼英監修)
*くもんの 学習漢字字典	もとの字は「總」。「悤」(<u>ばらばらのものを一つにまとめる</u>)と「糸」を合わせた字。たくさんの糸をまとめた《ふさ》をあらわした。のち、《すべてを一つにまとめる》ことをあらわす。(本堂寛監修)
*三省堂 小学漢和辞典	★他の字については「なりたち」を解説するが、この字に ついてはふれていない。抑制的なところを評価したい。 (長沢規矩也ほか編)

*を付した3点は、現在新刊として流通していませんが、いまでも学校図書館に配架されていることがあり、ここにかかげました。

「悤」に《まとめる》《あつめてたばねる》の意味があるのか?

「悤」[そう], そのものは《あわてる》《いそぐ》《あわただしいさま》《せかされるさま》をあらわす字であり, 《あつめてたばねる》という意味は, 用例からはみあたりません。

この字は、BC1 世紀にあまれた歴史書『史記』の「龜策列傳」に「悤悤疾疾」 [そうそうしつしつ] というのが初期の用例としてみられます。《あわただしく, すばやくあらわれる》といった意味でつかわれています。

7世紀,唐代に成立した晋代の正史『晋書』[しんじょ]「王彪之傳」にも「悤悤」 [そうそう] がつかわれます。

「悤」の字義について, 11 世紀にあまれた発音辞典の『集韻』は, この字を「悤悤」[そうそう]《いそがしいさま》,「急遽」[きゅうきょ]《急にものごとが行われるさま》と意味を説明しています。

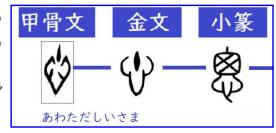
では、音符となった場合に、意味をもつのでしょうか。

清代の考証学者・段玉裁 [だんぎょくさい] は, 19 世紀はじめにまとめた注釈書『説文解字注』で「悤」をつぎのようにとらえています。

『説文解字』の「總,聚束[しゅうそく]也」の部分の注釈で,「**悤**,散意有」 (悤には**《ばらばらに散る》**」意味がある)と指摘しています。

その状態に対して、「糸をもってそれをたばねる」のが「總」としています。 音符の「悤」に<u>《まとめる》《あつめる》《あつめてたばねる》</u>といった意味が あるという学習漢字辞典の説明は、これとも真反対になります。

そもそも《あわただしい》という意味の「悤」は,甲骨文や金文からみられるものです。その字体は「心」の上部に針がささるものでした。篆書 [てんしょ] の段階で《まど》の意味の「囪」がくわわります。



このころになると、漢字をつかってあらわす概念がひろがり「思」や「恩」などあらたな字が創出されます。それらとの区別のために、篆書の段階で「悤」に、発音をあらわす音符「囱」[そう] がくわわったと推測できます。

「總」が登場するのも春秋戦国時代の篆書の段階です。《**糸をあつめてたばねる**》という意味でうまれますが、「悤」はこれも[そう]という発音をあらわすための音符だったといえます。

学習漢字辞典の説明は,こどもに対する影響が大きいだけに,こまかな検証が もとめられます。

| 1. 字義・意味の変転

「総」の変転状況 発音 A zong3 上声 [zŏng] B zong1 平声 [zōng]

ほんらいの意味 [原義] A ● 糸をあつめてたばねる (動詞) =

B **②**- ① たばねた糸をかぞえる単位 (量詞)「一総=糸 80 本」

┗ ❷- ② たばねた糸でぬう。(動詞)

2- ③ ぬいめ。(名詞)

❷- ④ 青色の絹。うすぎぬ。(名詞)

▲ 3 多くの糸をひとつにたばね、まとめたもの(名詞)

3- ① **ふさ**。色糸をたばねてつくった車馬のかざり。「朱総」 □ **3**- ② ふさ状のもの。

3-3 たば。わらたば。穂とわらをたばねたもの。

🔞 - ④ 髪をたばねる糸(もとゆい)

┖❸- ⑤ たばねた髪。「総角」《こどものたばね髪》

= A [本義] **4** あつめてたばねる (動詞)

- 4 ① たばねた糸で髪をあつめてたばねる
- **❹** ② たばねる。まとめる。あつめる。(≒束)(≒聚)「総木」
- **4**-③ あつまる。あう。(≒聚)「総会」《おおぜいよりあう》
- 4-3→4 あつまり。(名詞)
- **4** ⑤ あわせる。**4** ⑥ ひとつにする。(≒ー)
- **4**-⑦ くくる。(≒結)(≒凡)(≒括) **4**-⑦→⑧ くくり。(名詞)
- 4.⑨ むすぶ。(≒結) 4.⑩ つなぐ。(≒係) 4.⑪ もつ。とる。

派生した意味

─ A 〔引伸義〕 5 まとめる (動詞)

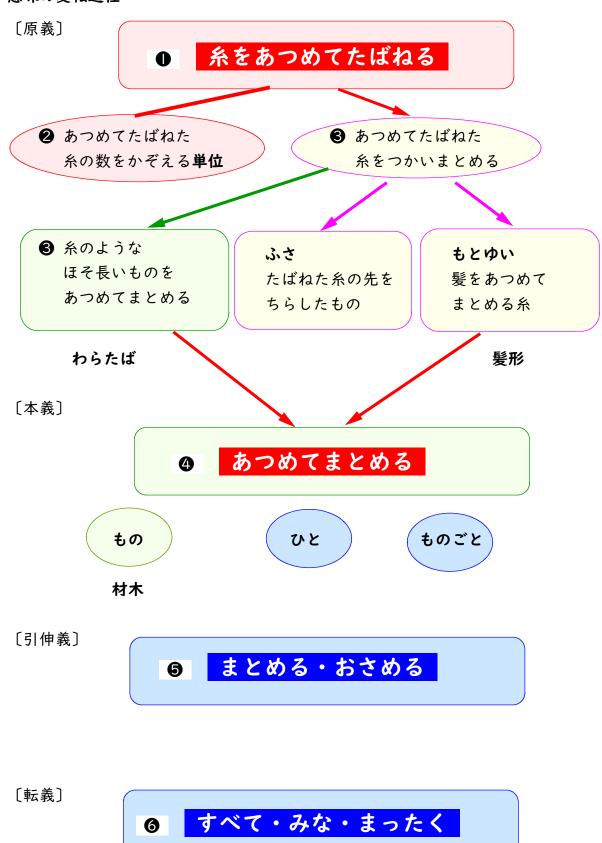
- **⑤** ① まとめる。すべてを一つにまとめる。(≒統)「総合」「総括」
- **⑤** ①→② (副詞)「総之」[これを総 [そう] ずるに]《まとめると》
- ⑤-③ おさめる。すべおさめる。(≒綜)「総己」「総治」
- **⑤** ④ とりしまる。引きしめる。(≒統)(≒綜)(≒監)
- **⑤** ⑤ ひきいる。統率する。(≒統)(≒綜)
- 6- ⑤→⑥ 全体をまとめる役。(名詞)「総督」「総統」

転成した意味

A [転義] **6** すべて (副詞)

- 6- ① みな。まったく。すべて。(≒皆)「総計」
- **⑥** ①- ② どれもこれも結局は。どうしても(俗語)。
- 6-3 にわかに。急に。
- **⑦ たとい** (接続詞) たとえ…でも。たとい。(≒縦)
- ❸ 連綿語の構成要素(名詞)「総総」

意味の変転過程



[原義] [本義] [引伸義]

 $lackbox{1}$ 糸をあつめてたばねる ightarrow ightarrow ightarrow ightarrow ightarrow ightarrow ightarrow

- **3** ③《わらたば》, **3** ④《髪を頭の上に集めてたばねる糸・もとゆい》や,
- ❸-⑤《あつめてたばねた髪》なども「総」の意味にくわわります。 「総」と《髪》は、切っても切れない関係になります。

こうした実態を反映させて、あつめてたばねる対象は、「糸」だけでなく、

4- ○ 「髪」がむすびつきます。

そして「木材」などさまざまな具体物がくわわり、ものや、人、ものごとなどを**4**- ② 「たばねる・まとめる・あつめる」ことの意味にまでひろがります。 このようないきさつから、「総」の意味から「糸」が脱落し、単に**4** あつめ てたばねる 《**あつめてまとめる**》という意味になったととらえられます。

これは用例からおしはかることができます。

春秋・戦国時代に周王室や諸侯の各国で歌われていた詩歌をあつめた最古の詩 集である『詩経』には、4つの詩に「総」がのっています。

うちわけは,②《たばねた糸をかぞえる単位》としての「総」が1例,③- ⑤ 《あつめてたばねた髪》で2 例,④《あつめてたばねる》が1 例あります。

春秋・戦国時代には、「原義」 ●《糸をあつめてたばねる》とともに [本義] ●《あつめてたばねる》という意味が定着していたことがわかります。

さらに、ひいて現代語に通じる**⑤ まとめる** (すべる・おさめる) がうまれます。

そして副詞として**⑥《すべて》**などの意味が登場することになります。

王権をみせびらかす「いとへん」の「総」

ここで、P.24「意味の変転状況」の「**③** - ①」にある《**ふさ**》《多くの糸をひとつにたばね、まとめて、先端をちらして、たらした**かざり**》について、たちどまってみてみます。

この意味での代表的な漢字語に「朱総」があります。語義と用例はつぎのようなものです。

【朱総】[しゅそう] 赤い色のふさ。色糸をたばねてつくった,車馬のかざり。 皇帝や皇后などが乗る馬車とウマなどをかざった。「流蘇」《糸や毛など で組んだかざりのふさ》ともいう。旗につけるものもあるという。

王后之五路:重翟,錫面 よみ:王后の五路,重翟 [ちょうてき]・錫面 朱總 [しゃくめん]・朱総

『周礼』春官宗伯・中車 意訳:君主の五つの車には、二つのキジの羽 (紀元前) をつけ、錫 [すず] に密着された面、赤いふさをつける。

参考:「朱総」を「しゅぶさ」と読むのは、日本語用法。

将来これがほしいために教育現場の管理を強化するような校長がめざす藍綬褒章の「綬」[じゅ] もかざりのひもで,にたようなものです。

漢字は、古代中国で王権による人民を支配するためにうまれ、つかわれてきた一面があります。「総」も例外ではありません。この「朱総」は、支配者と支配階級の権勢を象徴するものとしてつかわれました。

漢字「**糸**」(絲)は,カイコのマユの繊維をよったものをいいます。

畑作農耕社会だった漢字がうまれた地域にとって糸は,重要な産物でした。 **糸=絹糸**の生産は,世界にさきがけ BC3000 年ごろからはじまっています。はや くから遊牧社会との交易がおこなわれ,かわりに羊毛などを得て,支配者に富 が集中する原動力になりました。

前漢の BC2 世紀ごろには、シルクロードをつたわり絹織物が西方に輸出され、 国家をあげての産業になります。希少価値がたかいものでした。

農民は、養蚕を強要され、きびしい環境ではたらかされます。支配階級が豪華な絹製の衣服で着かざるのに対して、アサやクズなどの繊維をもとにしたそまつな着衣を身につけていました。権力者が、おしげもなく高価な絹をつかいはたすのも、**権勢をみせびらかす**おもわくがはたらいています。

いとへんの漢字に、こうした背景があったこともふまえておきたいことです。

12. 日本語における展開

1. 後熟語をつくらない

字音語は,すべて前項にあらわれ,後熟語をまったくつくらない傾向がみられます。古典中国語には「朱総」《赤い色のふさ》,「布総」《たばねた髪》などの後熟語があり,日本語でも「親総」《みずからおさめる》,「専総」《もっぱらおさめる》,「兼総」《あわせおさめる》,「該総」《ひろくおさめる》などの語があったようですが,死語になっています。わずかに略地名の「房総」「武総」などにみられる程度です。

2. 接頭辞として名詞の前につく用法

現代日本語で、圧倒的に多くみられるのは、以下の(A)で、ついで(B)の順につづきます。

(A) **《すべての**》(そのすべてをふくむ意) (≒全)

《全部ひっくるめる》

すべて。みな。すっかり。みんな欠けるところがない。

名詞の前につく接頭辞として《**すべての**》をあらわしてつくられる語です。

「意味の変転状況」でみる「6すべて」にあたります。

語例:総計・総和・総量・総得点・総合計・総画数・総まとめ・総トン数

(B)《**まとめる**》(すべてその状態にある・すべおさめる意)(≒統)

《全体をまとめる》

ひとつにする。ひとまとめにする。あつめたばねる。

おさめる。とりしまる。トップ。代表。

接頭辞や字音語素として名詞の前について《**まとめる**》(すべてその状態 にある・すべおさめる意)をあらわす語です。

「意味の変転状況」でみる「6まとめる」にあたります。

語例:「総一」総合・総合的・総括・総集編・総長・総理・総代

(A), (B) の順に漢字語と意味をみてみます。

(A)《**すべての**》(そのすべてをふくむ意)(≒全)

そうけい【総計】(する)全部の合計。{対語}小計。total

そうごうけい【総合計】全部の合計。total

そうわ【総和】総計。sum total

そうがく【総額】全体の金額。{類義語} 全額。total amount

そうすう【総数】全体を合わせた数。total number

そうてん【総点】得点の総計。総得点。grand total

そうりょく【総力】すべての力。全力。

そうりょくせん【総力戦】a total war

そうりょう【総量】全体の分量・重量・大きさ。総量規制。gross amount

そうまとめ【総まとめ】overall summary; (e.g. news) roundup

そうあたり【総あたり】試合に参加したチームや個人が、それぞれ全部の相手と 試合をすること。a round robin (competition)。また、くじ引きで、空くじのないこと。

「総」と「全」のつかいわけ

ながさ 全長(はしからはしまでの長さ)

全幅(はばいっぱい)

総延長(鉄道:ある観点からみた路線距離の総合計)

総延長(道路:道路の起点から終点までの距離。道路中心線上を測定したものをいう。他の路線と重複している区間や未供用区間などもふくめる。これらをふくめないのは「**実延長**」という。道路法)

ひろさ **総面積**(農地や道路も含め、居住地に転用可能なすでに開発された 面積の総計)

おもさ 総量(全体の分量や重さ)

全量(全体の重量。全体の容積)

総重量(包装・容器などもふくめた全体の重量)

全重量(全体の重量)

車両総重量(人が乗ったり,燃料を入れたときの重さ)

車両重量(クルマそのものの重さ)

総トン数(船体内の船室など囲われた部分の全容積を、100立方フィートを1トンとして算出した船のトン数の値。gross tonnage の訳語)

(B)《**まとめる**》(すべてその状態にある・すべおさめる意)(≒統)

そうごう【総合】(する)

大きくわけてつぎのふたつの意味があります。

(1) 個々別々のものを一つに合わせまとめること。(≒総括)

表記は、「総合」のほかに、かつては「綜合」「湊合」「惣合」がみられますが、 現代語では「総合」に統一しています。

古典中国語では、後漢の蔡邕 [さいよう] (132 年-192 年) 編『蔡中郎集』につぎの 2 例がみられます。

「今者受爵十有一人,總合戶數千不當一」薦太尉董卓表

「今總合為一事,不分別施之于三月,何也」月令問答

日本では,江戸時代中期の漢詩書,江村北海著 『日本詩史』一(1771年)が初出のようです。

「景象湊合、気骨兼完」

(2) ドイツ語《Synthese》[ジンテーゼ] の訳語。

へーゲル弁証法で、相反する規定あるいは概念、たがいに矛盾する定立と反定立とを、より高い概念に止揚することをいう。当初「合」「ごう」としていた。

また, 英語《synthesis》[シンタセス] の訳としてもつ かわれるようなった。

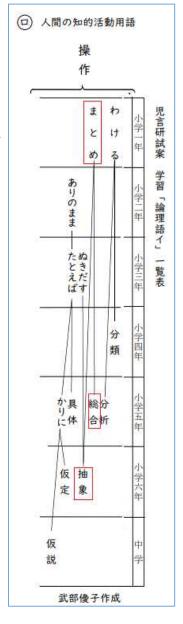
分析的思考によってとらえられたいくつかの部分・要素を結び合わせて統一的に構成することをさす。(↔ 分析)

これらの意味の「総合」は、『哲学字彙』(1881年) が初出のようです。 Synthesis 総合法

武部優子「**学習論理語イ一覧表**」では,人間の知的活動の「操作」にかかわる用語に「**まとめー総合**」,「わける一分析」を位置づけています。

【総合的】(形容動詞) ある体系のもとに, 個々のものごとを, 全体として大きく一つにまとめるさま。まとめられているさま。

「総合的な意見」「総合的に検討する」



【総合的な学習の時間】

「総合的な学習の時間においては、各学校は、地域や学校、児童の実態等に応じて、横断的・総合的な学習や児童の興味・関心等に基づく学習など創意工夫を生かした教育活動を行うものとする。」という趣旨で,2000 年から段階的に開始された。

【一読総合法】児童言語研究会が、1960 年代の初めに主体的な読みの指導法として提唱し、そして現在も実践・研究を深めている授業方式。(『読解指導過程』 一国語教育の体系化その2』:1963 年、明治図書出版)。従来型の、まず「通読」して全体を総合的に把握し、そのあと「精読」と称して分析的に究明していくような「総合→分析」方式ではなく、「分析→総合」の方式をとる。

【表現よみ総合法】読みは、一文一文の総合として進んでいくとのかんがえをもとに、単語、文構造、そして文章の内容を理解したうえで、表象化・情感化しながら音声化することを重視する授業方式。からだで感じて、感覚的にもわかるようになることをもとに、さらに理解を深めていく読みの過程をとることによって、生きた論理的思考力をやしない、生き生きした概念を習得できるようにしていく読みの指導法。

3. 接頭辞として名詞の上につくことで造語力をもった

「総」は、(A) 接頭辞として名詞の上について、《**すべての**》(そのすべてをふくむ意)をあらわすときには、和語のようなふるまいをします。そのかぎりで、日本語にすっかりとけこんでいます。ですから、意味も比較的理解しやすいようです。

「総〇」「総〇〇」と,ある一定の語をつづけると,即座に,それ相応のコト バがつくられてきました。造語力がかなりあることがわかります。

現代では、訓がありませんが、「音のみの漢字」のなかでも、「総」は日常的にかなりの程度、くりかえしつかわれていることがわかります。

一例をあげると、文化庁の「**漢字出現頻度数調査**(4)」でいくつかくらべて みると、それがよくわかります。(P.8 参照)

総 493 位 26708 回 0.052 % 73.370 % 専 757 位 15419 回 0.030 % 83.895 %		順位	出現回数	度数	累積度数
専 757 位 15419 回 0.030 % 83.895 %	総	493 位	26708 回	0.052 %	73.370 %
	専	757 位	15419 回	0.030 %	83.895 %
均 1204位 6481回 0.013 % 93.152 %	均	1204 位	6481 回	0.013 %	93.152 %
熟 1311 位 5291 回 0.010 % 94.365 %	熟	1311 位	5291 回	0.010 %	94.365 %

「総」は出現順位でいうと 500 位以内にはいります。上位 500 字のなかにふくまれる漢字です。また,累積度数をみると 73 %です。80 %以内でまかなえる漢字のなかにはいります。

1976 年国立国語研究所の「**現代新聞の漢字**」の全体順位 153 位や,2007 年の「**漢字出現頻度数調査**(3)」の全体順位 326 位(教科書での出現例は 246 位。新聞での出現例も 200 位台)にくらべれば,順位はさげていますが,いまなお,日本語でよくつかわれている部類にはいります。(P.7 参照)

4. うしなわれてきている | 字音読み漢字単独の用法

日本語にとけこんでいるといっても、 | 字音読み漢字単独としての用法は、現代語では副詞の「**総じて**」になごりをみせるだけで、あとはうしなわれました。

名詞「総」[そう] は《すべてのもの》《あらゆるもの》《全体》という意味で 12 世紀ごろからつかわれました。また,14 世紀には《上の衣(きぬ)》の意味でつかわれてきたようですが,現代語にうけつがれていません。

この名詞「総」をもとに、副詞の「**総に**」が《総体に・総じて・のこらず・ すべて・一斉に》の意味で 13 世紀ごろ登場したようですが、これもいまでは完 全につかわれていません。

名詞および副詞「すべて」に「**総て**」「凡て」「全て」といくつかの表記がありましたが,当用漢字表の音訓にとりあげられなくなり,かな表記でつづいてきました。ところが 2010 年常用漢字表改定で「全て」が追加され,「すべて」をおさえて一般化しつつあります。「総て」は過去のものになりました。

また動詞「すべる」で、かつては「**総べる**」がありましたが、これも当用漢字表で「統べる」に統一され、いまはつかわれていません。

そのうちに死語になる可能性がある「総じて」

副詞の「**総じて**」は,11 世紀はじめには,つかわれていたことがわかっているようです。それがいまでも,つかわれます。

「総じて出費が〇〇円台になりそうだ。」と《あわせて・全部で・合計して》という意味のつかいかたや、「総じてことしの夏は雨が多かった。」と《だいたい・概して》という意味でつかわれます。

ただし、どちらかというと文語調のニュアンスがあり、6年A漢字「熟」の『語釈・文例集』でふれた「熟する-熟す」に共通しますが、将来的に、死語になるか、あるかぎられた形でしかつかわれなくなる可能性があります。

副詞「総じて」は、サ変動詞の文語「**総ず**」が、口語化して「**総ずる**」となり、その連用形「総じ」に接続助詞「て」がついたことにより、なりたっていると考えられます。

しかしもとになるとみられる「総ずる(総ず)」は,現行の国語辞典には掲載されていません。古典をはじめ,20世紀までの文学作品などにあたっても用例を見つけることができませんでした。

ところが、近年の学術関係のデータベースからは、このコトバをいくつかみる ことができるのです。

以上を総ずると、PEG-rHSA は微小血管において血管を拡張することで酸素運搬能を維持するための人工酸素運搬体として利用可能であることが示された。

(厚生労働科学研究データベース 赤血球・酸素輸液の有効利用を目的としたヒト組換型アルブミン修飾製剤の開発)研究報告書(概要版)結論 2007-04-29

https://mhlw-grants.niph.go.jp/project/13337

以上を総ずるに、公平模倣とランキング関数の二つの概念の圏論的な定義を与え、それらを具体化することにより確率的 Büchi オートマトンに対する新たな概念を定義し、それらの有効性を示すとともに、結果として圏論的な定式化の有効性も示しており、よって本論文は博士(情報理工学)の学位請求論文として合格と認められる。

(東京大学学術データベース 学位請求 博士 審査の結果の要旨 2019-03-25)

https://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp > A36296 review

「以上を総ずると」とか、「総ずるに」という連語のかたちでつかわれています。これらから、「以上をまとめると」「まとめれば」といった意味だということがわかります。似たコトバには、「要するに」「詮ずるに」「畢竟 [ひっきょう] するに」といったものがかんがえられます。

じつはこの用法は、漢文訓読からきているようなのです。

「**総之**」という句法です。

「これを総[そう]ずるに」「これを総[す]ぶるに」などとよみます。

《これを要するに・これをまとめていうと・つまり》といった意味の句です。 一例をあげると、『史記』にみられます。

「總之不離古文者近是」

[これを総[そう] ずるに,古文を離れざる者,是[ぜ]なるに近し]史記·五帝本紀第一賛 「總之,楚越之地,地廣人希」

[これを総 [そう] ずるに、楚越の地,地広くして,人まれ] 史記・貨殖列傳第六十九

総の字誌 20230211a

にた句法には「按之」があります。「これを按 [あん] 案ずるに」と読み、やはり『史記』や古代の医学書などにでてきます。《これを思うに》という意味です。このコトバは、近代日本でも、自分の考えをのべるときに、冒頭で「**案ずるに**」と書いて《わたしが思うに》という意味の連語としていきながらえました。いまでも国語辞典によってはのっているものがあります。

「総ずる」があることが確認できれば、「総じて」は、サ変動詞の文語「**総ず**」が、口語化して「**総ずる**」となり、その連用形「総じ」に接続助詞「て」がついたことにより、なりたっているのはまちがいないようです。(P.10 参照)

ところが、現代語で通用する「○じて」と決定的なちがいがあります。 | 「字音読み漢字のサ変動詞(混種語動詞)から派生した副詞には「熟して」「関して」のような「○して」がありますが、「○じて」というものもあります。

I 字音読み漢字のサ変動詞(混種語動詞)から派生した副詞

「案ず・案ずる」→「案じる」……副詞「案じて」 「感ず・感ずる」→「感じる」……副詞「感じて」 「信ず・信ずる」→「信じる」……副詞「信じて」 「詮ず・詮ずる」→「詮じる」……副詞「詮じて」 「断ず・断ずる」→「断じる」……副詞「断じて」 「通ず・通ずる」→「通じる」……副詞「通じて」 「命ず・命ずる」→「命じる」……副詞「命じて」 「論ず・論ずる」→「論じる」……副詞「命じて」

おもなものをならべましたが、これらは、「ず形」(文語)→「ずる形」(口語) となって、現代語では上一段の「じる形」(口語)に変化しているのです。

「総ず・総ずる」→「総じる」………副詞「総じて」

ところが「総ず・総ずる」は口語の「総じる」という語形が一般化しないまま, 「総じて」だけがのこっているのです。

「総ず・総ずる」がそうであるように、「総じて」も将来的に、死語になるか、 あるかぎられた形でしかつかわれなくなる可能性があります。 そもそも | 字音読み漢字のサ変動詞(混種語動詞)そのものがむずかしいう えに、それらから派生した副詞のコトバの運用も、初学者や非日本語母語話者 にとって、意味理解と運用に困難さをともなうとみられている語群です。

愛する 関する 会する 解する 害する 慨する 期する 帰する 供する 決する 号する 際する 察する 策する 資する 熟する 食する 証する 接する 対する 題する 得する 損する 発する 反する 表する 要する 労する 類する

これら多くは、「熟す(文語サ変)→熟する(口語サ変)」から「熟す」と五段活用化していくながれがありますが、なかには「得する」「損する」のようにサ変動詞のまま、現代語にいきづくものも一部にあります。

(参照:6年A漢字「熟」の『語釈·文例集』2021 年 6 月 12 日)

13. 意味の指導構想

総 5年A漢字 [音] ソウ

- (1) 字源は、「糸」に意味がある。形声文字の音符は、発音をあらわすだけである。
- (2) 意味の変転過程と逆に、現代日本語では《すべての》が優勢である。

意味の指導構想 小学校5年

全体をつらぬく共通のイメージ すべてをひとつにまとめる

- (1) すべての「学校の児童の総数」「総会」「総画数」「総まとめ」
- (2) まとめる「みんなの意見を総合する」「総合的な学習の時間」
- * それほど意味のへだたりが大きくないので、実態によっては、意味を2つにくわけしなくてもよいだろう。

	文字のなりたち		日本語での漢字の意味
	意味の変転過程		現代語の意味分布 且 日本語用法
原義	●《糸をあつめてたばねる》	代表的 な意味	①全部ひっくるめる。
	をあらわす形声文字。	な息味	《 すべての 》《すべて・みな・すっかり》
	❷《多くの糸をたばねて, ま		《みんな欠けるところがない》
	とめた ふさ 》の意味もある。		総計・総数・総点・総額・総量・
	❸《糸を数える単位》		総和・総得点・総延長・総画・
本義	4 《あつめてたばねる》		総画数・総決算・総選挙・総動員・
	総髪・総木		総会・総員・総勢・総体・総力・
引伸義	⑤ 《まとめる・おさめる》		総則・総論・総称
	総合・総括・総督		日総あたり・総ざらい・総まとめ
転義	⑥ 《すべて・みな・まったく》		②全体をまとめる。
	総計	の意味	《まとめる》《ひとつにする》
	⑦《たとえ…でも。たとい》		《ひとまとめにする》《あつめたばねる》
	❸ 連綿語の構成要素		《おさめる》《とりしまる》《トップ・代表》
現代	①《あつめる・まとめる》		総合・総合的・総括・総集・総長・
中国語	②《すべての・全面的な》		総務・総理・総監・総代・ <mark>日</mark> 総じて
	③《総括した》		③ふさ。ふさ状のもの。
	④《全般を指導している》		総状花序《フジ,ヒヤシンスなどの
	⑤《ずっと・いつも》		ような花のならびかた》
	⑥《結局・最後には》		④かずさ,しもうさの略。
	⑦《どうみても》		日房総半島・総武線